徒然草における希望表現について

柴田昭二
連仲友

目次

一、はじめに
二、希望表現の構成形式
三、各形式の用法
四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿[1]を受け、徒然草を研究資料として、それにおける希望表現[2]の実態を解明しようとするものである。

『日本古典文学大辞典[3]』などによると、徒然草は中世南北朝期の歌人、能書、また故実家である吉田兼好（弘安六〈一二八三〉年頃―正平七〈一三五二〉年以後）の随筆であり、兼好の尚古的美意識、中古への追慕、中古の美と伝統に対する憧憬は重要な特徴である。写本は流布本系統と正徹本系統に分けられ、流布本の成立は元徳二（一三三〇）年十一月以降、翌元弘元（一三三一）年九月以前と推定される。形態は雑纂形式の随筆であり、内容は文の道、作文、和歌、管弦の道、また有職に公事の方など多岐多方面にわたり、花鳥風月、春夏秋冬、人事、釈教、恋愛、無常の哀れに触れる。その文体は基本的には、中古文学を尊び、平安時代の和文の文体を手本とした、広い意味での擬古文といえる。

テキストには、久保田淳校注『徒然草』（岩波書店　新日本古典文学大系39　一九八九年一月第一刷発行）を用いる。その底本は現存最古の写本である、永享三（一四三一）年正徹書写の正徹本を用いる。本文作成に、底本の仮名書きに漢字を宛て、漢字書きに読み仮名を付け、底本にある振り仮名には〈〉を施し、仮名に漢字を宛てた場合はもとの仮名を振り仮名に残し、校注者の付けた読み仮名には（）を施している。

二、希望表現の構成形式

徒然草（以下、「本書」と略す）における希望表現と認められる構成形式とそれぞれの用例数は以下の通りである。

「まほし」（二二例）
「たし」（八例）
「ばや」（四例）
「もがな」（三例）
「ほし」（三例）
「ねがはし」（二例）
「欲」（一四例）
「願」（一三例）
「ねがふ」（一六例）
「のぞむ」（七例）
「いのる」（一例）
「こふ」（一例）
「もとむ」（二六例）

右から見られるように、本書における希望表現の構成は、付属語では類義語の助動詞「まほし」と「たし」がともに使用されるが、「まほし」が優勢である。終助詞「ばや」「もがな」が見られるが、伝統的な「にしかな」「てしかな」「なむ」が用いられない。自立語では形容詞「ほし」「ねがはし」、名詞「欲」「願」、動詞「ねがふ」「のぞむ」「いのる」「こふ」「もとむ」が用いられる。

三、各形式の用法

1、「まほし」の用法

まず、「まほし」の用法を見る。本書に「まほし」は二二例見られる。

（1）愛敬ありて、言葉多からぬこそ、あかず向かはまほしけれ。
（第一段　七九頁）

（2）いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし。
（第四十三段　一二〇頁）

例（1）（2）は地の文の文末における用例である。例（1）は「愛嬌があり、余計なことを言わない人とは、飽きずに向き合っていたいものである。」の意、例（2）は「いったいどんな人か知りたいと思う。」の意と解され、いずれも自身の身辺の状況を客観的に述べる文脈で使われ、希望表現の下位分類の「願望[4]」を「説明[5]」する用法である。

（3）行かん方知らまほしく、見送りつゝ行けば、
（第四十四段　一二一頁）

（4）同じ心に向かはまほしく思はむ人の、つれ〴〵にて、
（第百七十段　二四五頁）

例（3）（4）は連用形で従属節における用例である。例（3）は「若い男が、どこに行くのか知りたくて、後ろを追って行くと、」の意、例（4）は「お互いに気が合い対面したいと思う人が、所在なげにして、」の意と解され、これも「願望」を「説明」する用法である。

（5）近付かまほしき人の、上戸にて、ひし〳〵と馴れぬる、又うれし。
（第百七十五段　二五三頁）

例（5）は連体形で連体修飾法の用例である。「近づきたい人が、上戸で、すっかり親しくなってしまうのも、また嬉しいものである。」の意と解され、これも「願望」を「説明」する用法である。

（6）「わが宗なれば、さこそ申さまほしかりつれども、」
（第二百二十二段　二九三頁）

例（6）は話者の過去の経験を述べる用例である。「自分の宗旨なので、念仏を申し上げたかったけれども、」の意と解され、これも自己の「願望」を「説明」する用法である。

右の六例から見られるように、徒然草における「まほし」はいずれも宗教的な希望表現ではなく、作者自身のあるいは身辺の「願望」を「説明」する用法であり、話者の「願望」を直接発する「表出」の用法は見られない。

また「まほし」は「あらまほし」の形で用いられることが多く、「まほし」二二例のうち一三例が「あらまほし」である。

（7）少しのことにも先達はあらまほしきことなり。
（第五十二段　一二九頁）

例（7）は「ちょっとしたことでも、案内者というものはあってほしいものだ。」の意と解され、これも「願望」を「説明」する用法である。

（8）人は、かたち有様のすぐれ、めでたからむこそ、あらまほしかるべけれ。
（第一段　七八頁）

（9）埋もれぬ名を永き世に残さんこそあらまほしかるべきに、
（第三十八段　一一四頁）

（10）只明暮念仏して、安らかに世を過ぐす有様、いとあらまほし。
（第百二十四段　一九八頁）

例（8）は「人は容姿風采の優れていることが望ましい。」の意、例（9）は「不朽の名誉を後世に長く残すことこそ望ましいことであろうが、」の意、例（10）は「是法法師がひたすら念仏して、平穏に世を過ごす様子は、誠に理想的である。」の意と解され、これらの「あらまほし」は「望ましい」「理想的だ」という意を表す定型的表現である。

2、「たし」の用法

次に、「たし」の用法を見る。本書に「たし」は八例見られる。

(11) ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事の方、　（第一段　七九頁）

(12) 常に聞きたきは、琵琶、和琴。　（第十六段　九三頁）

(13) 家にありたき木は、松、桜。　（第百三十九段　二一九頁）

例(11)(12)(13)は地の文における主語の部分での用例である。例(11)は「身に付けたい教養は、正当な学問、漢詩・和歌・管弦の才能、更にしきたりや政務儀礼の方面で、」の意、例(12)は「いつも聞きたいのは、琵琶や和琴だ。」の意、例(13)は「家に植えておきたい木は、松・桜だ。」の意と解され、いずれも著者の「～たいのは　～だ」という自身の身辺に対する「願望」を「説明」する用法である。

(14) 帰りたければ、ひとりつい立ちて出にけり。　（第六十段　一四〇頁）

(15) 我食ひたき時、夜中にも暁にも食ひて、　（第六十段　一四〇頁）

(16) いよ〳〵よくしたく覚えて、嗜みけるほどに、説経習ふべき暇なくて、年寄りにけり。　（第百八十八段　二六三頁）

例(14)(15)(16)は地の文における従属節での用例である。例(14)は「この僧都は、帰りたくなると、一人ぷいと立って行ってしまう。」の意、例(15)は「この僧都は、自分の食べたい時は、夜中でも明け方でも食べて、」の意、例(16)は「早歌を更にうまくやりたいと思って努力しているうちに、説教を習う時間がなくなり、年を取ってしまった。」の意と解され、いずれも身辺の第三者の「願望」を「説明」する用法であり、くだけたニュアンスが感じとれる。

このように、本書には「まほし」と「たし」が併存している。両者はともに希望の意を表す点においては類義であるが、鎌倉時代の資料に次の記述がある。

『千五百番歌合』[6]（一二〇二―〇三頃）に

左　いざいかにみ山のおくにしをれても心しりたき秋のよの月　季能卿

『千五百番歌合』七七一番

に対する藤原定家の判詞に「左はしりたきといへる雖聞俗人之語未詠和歌之詞歟」と評を下している。定家の和歌における語の使用について、「まほし」は雅語、「たし」は俗語という意識があり、実際に「たし」は鎌倉時代初期までの和文にほとんど用いられていない。また本書での「まほし」の用例に比して、「たし」の用例は、身辺の世俗的な記述に用いられるように見える。「たし」は中世になると会話文に多く使われるようになるが、平安朝の文章を意識した擬古文の本書に「たし」が使われているのは、兼好の用いる口頭語が書き言葉として本書の地の文に混入したものと考えることができよう。

3、「ばや」の用法

次に、「ばや」の用法を見る。本書に「ばや」は四例見られる。

(17) 「此社の師子の立てられやう、定習ひあることに侍らん。ちとうけたまはらばや」と言はれければ、　（第二百三十六段　三〇四頁）

(18) 「その人に逢ひたてまつりて、恨み申さばやと思ひて、尋申なり」と言ふ。　（第百十五段　一八九頁）

例(17)(18)は会話文における用例である。例(17)は「このお社の獅子の立てられ方は、さぞかしいわれのあることなのでしょう。いささか承りたい。」の意と解され、言い切りの形で話者の「願望」を直接「表出」[7]する用法である。例(18)は「その敵にお会いして、報復させていただきたいと思って、お尋ねしたのです。」の意と解され、従属節に用いられて話者の「願望」を「説明」する用法である。

(19) 雅房の大納言は、才賢く、よき人にて、大将にもなさばやとおぼしめしける頃、　（第百二十八段　二〇〇頁）

(20) 皆人、別当入道の包丁を見ばやと思へども、　（第二百三十一段　二九八頁）

例（19）（20）は地の文における用例である。例（19）は「雅房の大納言は、学才に優れ、立派な人であったから、上皇が近衛大将にも任じたいとお考えになられていた頃、」の意、例（20）は「人々はみな、別当入道の包丁さばきを見たいと思ったが、」の意と解され、いずれも第三者の仏教的でない世俗的な「願望」を「説明」する用法である。和歌中の用例は見られない。

4、「もがな」の用法

次に「もがな」の用法を見る。本書に「（も）がな」は三例見られる。

（21）「あはれ紅葉を焚かむ人もがな。」（第五十四段　一三二頁）

（22）旅の仮屋、野山などにて、「御肴、何がな」など言ひて、芝の上にて飲みたるも、おかし。（第百七十五段　二五三頁）

（23）心あらむ友もがなと、宮こ恋しう覚ゆれ。（第百三十七段　二一三頁）

例（21）（22）は会話文、例（23）は心話文における用例である。例（21）は「ああ紅葉を焚いてくれる人が居てほしい。」の意、例（22）は「酒の肴が何か欲しいな。」の意、例（23）は「風情を解する友がいてほしい。」の意と解され、いずれも仏教的でない「願望」を「表出」する用法である。

5、「ほし」の用法

次に、「ほし」の用法を見る。本書に「ほし」は三例見られる。

（24）内を慎まず、軽くほしきまゝにして、みだりなれば、遠き国必背く時、初めて謀事を求む。（第百七十一段　二四六頁）

（25）我等が心に念々のほしきまゝに来り浮ぶも、心といふもののなきにやあらむ。（第二百三十五段　三〇三頁）

（26）巧みにしてほしきまゝなるは、失の本なり。（第百八十七段　二六二頁）

例（24）（25）（26）は地の文における「ほしき」に「まま」が付く用例である。例（24）は「内政を慎まず、軽率に思うままにして、乱れるならば、遠い国が必ず反乱を起こす時に、」の意、例（25）は「われわれの心にさまざまな思いが気ままに現れることも、心というものの実体がないからであろうか。」の意、例（26）は「器用であっても勝手気ままであるのは、失敗のもととなる。」の意と解され、いずれも仏教的でない、世俗的な「願望」を「説明」する定型的用法である。

6、「ねがはし」の用法

次に、「ねがはし」の用法を見る。本書に「ねがはし」は二例は見られる。

（27）いでや、この世に生れ出でば、願はしかるべきことこそ多かめれ。（第一段　七七頁）

（28）命を失へるためし願はしくして、身の全く久しからむことをば思はず。（第百七十二段　二四七頁）

例（27）は「人がこの世に生まれてきたからには、こうはありたいと願うはずのことが多くあろう。」の意、例（28）は「情欲に引かれ命を失った前例を好ましく思って、我が身を全うして長生きしようとは考えず、」の意と解され、いずれも仏教的な意味を持たず、自らの世俗的な「願望」を「説明」する用法である。

7、「欲」の用法

次に、「欲」の用法を見る。本書に「欲」は一四例見られる。

（29）世の人の心迷はすこと、色欲にはしかず。（第八段　八四頁）

（30）大欲は無欲に似たり。（第二百十七段　二八八頁）

例（29）における「色欲」は「六欲」の一つで感覚的な「欲望」を表す仏教用語であり、例（30）における「大欲」「無欲」は仏教用語でなく広く世俗的な「欲望」を表す。いずれも名詞用法である。

(31) 楽欲するところ、一には名なり。　（第二百四十二段　三一四頁）

例（31）における「楽欲する」は、「願い求めるものは、」意を表す動詞用法である。

8、「願」の用法

次に、「願」の用法を見る。本書に「願」は一三例見られ、一例ずつの「願」「願文」以外は、すべて「所願」である。

(32) 「夜を日に継ぎて、此事彼事怠らず成じてん」と願を起こすらめど、　（第二百四十一段　三一三頁）

(33) 願文に作善多く書き載せたる。　（第七十二段　一四九頁）

例（32）における「願」、例（33）における「願文」は仏教用語としての名詞用法である。

(34) 所願はやむ時なし。財は尽くる期あり。　（第二百十七段　二八六頁）

(35) 所願あれども叶へず、銭あれども用ゐざらむは、全貧者と同じ。　（第二百十七段　二八七頁）

(36) 病を受けて死門に臨む時、所願一事も成ぜず。　（第二百四十一段　三一三頁）

例（34）（35）（36）における「所願」は仏教用語でなく、一般的な欲望・願いの意を表す名詞用法である。

9、「ねがふ」の用法

次に、「ねがふ」の用法を見る。本書に「ねがふ」は一六例見られる。

(37) 身の後の名、残りてさらに益なし。これを願ふも次に愚かなり。　（第三十八段　一一五頁）

(38) 仏道を願ふといふは、別のことなし、暇ある身に成て、世の事を心にかけぬを第一の道とす。　（第九十八段　一七三頁）

例（37）における「願ふ」は「世俗的な名誉を追求するのも、」の意、例（38）における「仏道を願ふ」は仏教用語として「仏法を求めるといふことは、」の意であり、いずれも動詞用法である。

(39) 銭を財とすることは、願ひを叶ふる故也。　（第二百十七段　二八七頁）

(40) よろづの願ひ、此三にはしかず。　（第二百四十二段　三一四頁）

例（39）（40）における「願ひ」はいずれも世俗的な「願うこと」の意を表す動詞連用形の名詞用法である。

10、「のぞむ」の用法

次に、「のぞむ」の用法を見る。本書に「のぞむ」は七例見られる。

(41) ひとへに高き官位を望むも、次に愚かなり。　（第三十八段　一一四頁）

(42) いはんや、及ばざる事を望み、叶はぬことを愁へ、来らざる事を待ち、　（第百三十四段　二〇七頁）

(43) もとより望むことなく、羨まざらんは、第一なり。　（第百五十一段　二三〇頁）

例（41）（42）（43）における「のぞむ」は「高い官位を望むのも、」「できない事を望み、」「深く知ろうと望むことなく、」の意を表し、いずれも世俗的なことを願い望む動詞用法である。

(44) たとひ望みありといふとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。　（第五十八段　一三六頁）

(45) なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ、望み深きを見て、むげに思ひくたすは僻事なり。（第百四十二段　二二四頁）

例（44）（45）における「のぞみ」はいずれも世俗的な希望を表す動詞連用形の名詞用法である。

11、「いのる」の用法

次に、「いのる」の用法を見る。本書に「いのる」は一例見られる。

(46)「験あらむ僧達、祈心みられよ」など言ひしろひて、（第五十四段　一三二頁）

例（46）は「お祈りになってみなさい。」の意を表す動詞連用形用法である。

12、「こふ」の用法

次に、「こふ」の用法を見る。本書に「こふ」は一例見られる。

(47) 惜しむよししして乞はれんと思ひ、勝負の負けわざにことづけなどしたる、むつかし。（第二百三十一段　二九九頁）

例（47）における「乞はれんと思ひ」は「相手から乞い求めるようにする」の意を表す動詞用法である。

13、「もとむ」の用法

次に、「もとむ」の用法を見る。本書に「もとむ」は二六例見られる。

(48)「衣冠より馬、車まで、あるに従ひて用ゐよ。美麗を求むることなかれ」とぞ、（第二段　八〇頁）

(49) 生をむさぼり、利を求めて、やむ時なし。（第七十四段　一五二頁）

(50) よろづのこと、外に向きて求むべからず。（第百七十一段　二四六頁）

例（48）（49）（50）は「華美を求めるな。」「利益を求めて、」「遠くのものに目を向けてねらってはならない。」の意を表し、いずれも世俗的な希望を表す動詞用法である。

四、おわりに

以上、徒然草における希望表現の構成と用法を考察してきた。随筆という性格上、「心にうつりゆくよしなしごと」を思うままに記述する態度が貫かれ、世人の思いや願いを書き記す場面は少ない。

そしてその希望表現の構成形式については、付属語として、助動詞「まほし」「たし」がともに見られる。終助詞「ばや」「もがな」を用いるが、「にしかな」「てしかな」「なむ」は用いない。自立語形式としては、形容詞「ほし」「ねがはし」、名詞「欲」「願」、動詞「ねがふ」「のぞむ」「いのる」「こふ」「もとむ」が見られる。

各構成形式の用法については、「まほし」は希望表現の下位分類の「願望」を「説明」する、伝統的な通常の用法である。一方「たし」は限定された用法が見られ、やや個人的なくだけた場面のニュアンスが感じられる。伝統的な和語の終助詞の「ばや」は「願望」を「表出」する用法と「説明」する用法が見られるが、「もがな」はすべて「願望」を「表出」する用法である。形容詞「ほし」「ねがはし」は「願望」を「説明」する用法である。名詞「欲」「願」は仏教的な欲望・願いと世俗的な欲望・願いを表す。動詞「ねがふ」「のぞむ」は動詞用法と動詞連用形名詞用法が見られるが、「いのる」「こふ」「もとむ」は動詞用法のみ見られる。

また、「まほし」は全用例二二例のうち一三例が「あらまほし」の形をとり、「ほし」はすべての用例が「ほしきまま」、「願」は全用例一三例のうち一一例が「所願」の形であり、いわゆる定型的用法が目立つ。以上、すべての用例が話者自身の「願望」を表す用法であり、「なむ」など相手に対する「希求」を表す用法は見られない。

全体的には、本書において助動詞、助詞、形容詞形式が希望表現の中核であり、名詞、動詞形式は希望表現の周辺的な存在であるといえる。

【注】

（1）柴田昭二、連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部第１０９号』平成12年3月

（2）ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「～たい」の形で、「希求」は「～てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称～たい」「一人称～てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称～たかった」「一人称～てほしかった」、二人称形式「二人称～たいか」「二人称～てほしいか」、三人称形式「三人称～たがる」「三人称～てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

（3）『日本古典文学大辞典』第四巻　岩波書店一九八四年七月第一刷発行

（4）注（2）参照。

（5）注（2）参照。

（6）有吉保『千五百番歌合の校本とその研究』（風間書院　昭和四三年三月）による。

（7）注（2）参照。

（しばたしょうじ　　香川大学名誉教授）
（れんちゅうゆう　　広島市立大学客員研究員）

（二〇二一年一一月三〇日受理）